

ヨハンネス・デ・ツェラヤ

『論理学入門』（1521年）

山内 志朗 訳

Johannes de Celaya,

Dialectice Introductiones

『論理学入門』（1521年）

記号表示と現前化／表現について（fol. 4v）

「記号表示すること（significare）」は一般に次のように定義される。記号表示とは認識能力に或るものまたは或るものどもを或る仕方
で現前化すること（repraesentare）¹⁾である。

註1。「認識能力」に現前化されるのであって、知性的能力に対してではない。というのは、或る名辞は動物に対して現前化／表現を行うが、動物は知性的能力を持つのではなく、認識能力を持つにすぎないからである。

註2。「或るもの」というのは、単数の、集合的でない名辞に対してである。例えば「ソクラテス、人」等々といったものである。

註3。「或るものども」というのは、集合的な名辞、複数の名辞に対してである。「民衆、人々」等々である。

註4。「或る仕方で」と言われるのは、共義語に対してである。例えば、「総ての、～でない」等々という場合である。

このような区別に対して疑問として出されるのは第一に「現前化／表現する」とは何かということである。これに対しては現前化／表現するとは、或るものまたは或るものどもを或る仕方
で認識させることであり、この内実を解明するためには、或るものを現前化／表現するとは四つの仕方
で語られることが注意されるべきである。

1) 第一には、対象的に（objective）²⁾言われる場合で、「現前化／表現」ということは認識対象であることに他ならず（nihil aliud）、その対象を媒体として、認識や理解作用が生じる。この意味では、この世界のどの事物も現前化／表現されると言われる。というのも、どの事物も、自らの認識を引き起こすために認識対象となりうるからであ

る。全ての事物は自らを現前化／表現すると言える。

2) 第二には、作動因として (effective) 現前化／表現する場合であり、この意味では認識や理解作用の作動因であることに他ならない。この意味で我々の精神は、作動因として現前化／表現する。

3) 第三には、形相的に (formaliter)³⁾ 現前化／表現するとも言われ、この意味では認識であること、理解作用であることに他ならない。この意味で心的名辞 (termini mentales) は現前化／表現されると言われる。

4) 第四には、道具的に (instrumentaliter) 現前化／表現する場合もある。この場合は道具としてあって、この道具を媒介することで、認識や理解作用が成立する。この意味で音声名辞や所記名辞は現前化／表現されると言われる。「認識」という部分を置いたのは「単義語」⁴⁾ のためであり、また「理解作用」という部分を置いたのは、「共義語」のためである。

「対象的に現前化する」という定義においては「理解作用」という冗語的な部分は置かなかった。というのは、「人」と「動物」は、「総ての人は動物である」において対象となっており、それらを媒介として、「総ての」と「である」に関する理解作用が生じている。というのも、以下のところで説明されるように、総ての論理学者が述べるように、共義語は単義語を対象として有するからである。このことを私が述べたのは、学芸学部で訓練を十分積んでいない当世のある人 (aliquid modernus) のことを考えてである。その人は、初学者を前にして、私が導入したその部分を不要のものと断じている。

また同じ当世の人は次のように信じている。つまり、或る名辞が定義されるのと同じ仕方でも、当該箇所でも措定されたものは定義ないし定義の部分、さもなければ定義されたものであると。そして次のように述べる。私が置いた「他ならない (nihil aliud)」というのは余計であると。しかし、もしこの議論が妥当だとすれば、「人は理性的動物である」という場合と同様に「である」は次のような理由で余計なもの

であるということになる。つまり、「である」は定義の部分でも定義されたものでもなく、免罪が与えられるべきものである。免罪云々と言われるのは、そこで論理的なものを享樂し始め、言葉はこれらの定義のみならず、他の点においても最近能力における適性を述べるものとなるからだ。

《訳注》

1) *repraesentare* に対する訳語としては「現前化、再現、再現前化、表現、表象」などが挙げられる。「再現、再現前化」という訳語がしばしば選ばれるが、これはあまり適当ではないと思われる。オッカムの抽象的認識理論を踏まえた近世の唯名論者においては、「再び」という契機が明示される場合もあるが、一般には「非現前のものを現前化すること (*absens praesens facere*) 」と説明されることが多く、「再現、再現前化」とは訳しにくい。語源的に見ても語頭の *re* は反復を表現するものではないことは確認されるべきである。

また、「表象」という訳語は、本来「象^{かたど}る」こと、つまり、実物と模像、本人と彫像の間に成り立つ類似的関係を指すために選ばれた訳語なのだが、心的な状態を指すことが多くなった。ここでは、そういった心的状態として「表象」を捉える。スコラ的現前化／表現理論では基本的に現前化／表現は精神にではなく、事物に属するものとされるので（なお、ツェラヤはその系譜には属していないが）、「現前化、表現」の訳語を選ぶ。訳し分けることも考えられるがここでは「現前化／表現」という訳語を選ぶ。

2) ここで言われる「対象 (*obiectum*) 」とは、「客観」と訳されるべきものではなく、事物の側において認識の対象となっている規定相のことである。したがって、ソクラテスにおいて「人間性」が「対象」となる。「对象的に」についても「対象の側において」といった意味で考えてよい。

3) 「形相的に (*formaliter*) 」という語は多義的であるが、ここでは

「本質的に (essentialiter)」と同義と捉えてよい。

4) 単義語 (cathegoreumata) とはそれ自体で意味を有する語のことであり、共義語 (sincathegoreumata) とは、それ自体では意味を持たず、他の語と共にあることで意味作用を有すると考えられるものである。例えば「総ての人は走る (omnis homo currit)」という場合の「総ての」がその例となる。

【ラテン語原文】

Johannes de Celaya (1490-1558), *Dialectice Introductiones* (1521)

ly "significare" sic solet diffiniri. Significare est representare potentie cognitive aliquid vel aliqua vel aliquialiter. Dicitur notanter "potentie cognitive" et non intellective: quia aliqui termini bene representant brutis, tamen brute non habent potentiam intellectivam sed cognitivam. Dicitur notanter "aliquid" propter terminos singularis numeri non collectivos ut sunt isti "Sortes, homo" et sic de aliis. Dicitur "aliqua" propter terminos collectivos et propter terminos pluralis numeri ut sunt isti "populus, homines" et sic de aliis. Dicitur, "aliquialiter" propter sincathegoreumata ut sunt ista "omnis non" et sic de aliis.

Circa istam distinctionem dubitatur primo quid sit representare ad hoc respondetur quod representare est facere cognoscere aliquid vel aliqua vel aliquialiter et pro elucidatione huius materie est advertendum quod quadriffariam dicitur aliquid representare.

Uno modo obiective et nihil aliud est quam esse obiectum quo mediante causatur noticia vel actus intelligendi et isto modo quodlibet ens mundi dicitur representare quia quodlibet ens mundi potest esse obiectum ad productionem noticiae suiipsius.

Secundo modo dicitur aliquid representare effective et nihil aliud

est quam esse causam efficientem noticie vet actus intelligendi et isto modo anima nostra dicitur representare effective.

Tertio modo dicitur aliquid representare formaliter et est esse noticiam vet actum intelligendi: et isto modo termini mentales dicuntur representare.

Quarto modo dicitur aliquid representare instrumentaliter: et est esse instrumentum quo mediante causatur noticia vet actus intelligendi: et iste modo dicuntur representare termini vocales et scripti in omnibus istis diffinitionibus.

Posui illam particulam noticia propter cathegoreumata et illam particulam actus intelligendi propter sincathegoreumata. Nec posui illam particulam actus intelligendi superfluum in diffinitione de ly "representare" obiective: nam ly "homo" et ly "animal" sunt obiecta in ista "omnis homo est animal" mediantibus quibus causatur actus intelligendi de ly "omnis" et de ly "est", secundum enim omnes logicos e t[sic, ut?] inferius declarabitur sincathegoreumata habent cathegoreumata pro obiectis, hoc dixerim propter aliquem modernum parum in artibus excitatum qui in suis importatis asseruit illam particulam superfluum positam a me.

Idem etiam modernus credit quod, quomodo diffinitur aliquis terminus, quicquid illic ponitur est diffinitio vel pars diffinitionis aut diffinitum, et ideo dicit quod ly "nihil aliud" quod posui est superfluum et si istud argumentum valeret, sequeretur quod ly "est" ponitur superflue quomodo dicimus "homo est animal rationale": quia non est pars diffinitionis aut diffiniti sed danda est illi venia quia nunc incipit gustare logicalia et verba dicunt aptitudinem in potentia propinqua non solum in istis diffinitionibus sed in omnibus aliis dandis.

【解題】

ヨハンネス・デ・ツェラヤ（以下、ツェラヤと略記、1490-1558）は、ほんの一部の業績しか研究されないままにとどまる16世紀初頭のスペインの学者である。数学者、天文学者、哲学者として知られるが、論理学のほんの一部が紹介されているにすぎない。伝記的事実もほとんど不詳のままである。だが、16世紀初頭のパリ大学の学問状況を調べるには重要な人物である。パリ大学のモンテーギュ学寮（ラテン名モンス・アクトゥス学寮）で、スコットランド出身の大論理学者ジョン・メアーの下に学ぶ。ジョン・メアー（1478-1540）は、ブルゴスのヒエロニムス・バルドゥスとトマス・ブリコットの弟子で、生まれはスコットランドだったが、パリ大学で教授を務めた。ジョン・メアーは論理学においては、名辞論者と呼ばれ、『ペトルス・ヒスパヌス論理学綱要註解』（1505）、『アリストテレス論理学入門』（1508）、『論理学問題集』（1528）、『命題集全四巻註解』（1509-1515）を著している。

ジョン・メアーの下にはスペインからの留学生が多く在学していた。セゴビアのアントニウス・コロネル（?-1521）、ガスパル・ラックス（1487-1560）などもそうである。そのジョン・メアーの弟子として、ツェラヤがいる。なお、ペトルス・ラムスはこういった人々の教える論理学を、煩瑣にして無用で学びにくい学問にしていると考え、罵倒と批判を浴びせている。

ツェラヤは『ペトルス・ヒスパヌス論理学綱要第一巻解明』（1515）、『論理学入門』（1521）などを残している。

上で紹介したのは、このツェラヤの『論理学入門』の「現前化」をめぐる一節である。この箇所は、E.J.Ashworth, *Language and Logic in the Post-Medieval Period*, Dordrech, 1974にも紹介されているが、「現前化、表現、表象 (repraesentatio)」の系譜学の視点からはあまり注目されないままできている。Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd. 8 (1992) において、Repraesentation の項目において「16、17世紀

の講談哲学」の部分を担当している S. Meier-Oeser (pp. 797-800) は、現前化／表現に関する四契機論者としてツェラヤを紹介してる。

こういった現前化の四分類は、パリ大学で学んだスペインの学生達によって本国に持ち帰られ、そこで広く教授された跡を17世紀まで辿ることができる。

しかしながら、四契機への分類がそのまま継受されたのではない。ドミンゴ・ソト (1494-1560) や聖トマスによるヨハネス (1589-1631)、ディダクス・マシウス (Didacus Masius) といった人々は、認識させる>現前化／表現する>記号表示する (facere cohnoscere>repraesentare>significare) といった序列を設定し、表現に三契機を認めるようになる。

ここでツェラヤに従う人々を四契機論者とし、ソトに従う人々を三契機論者と仮に呼んでおこう。

ここで、四契機論と三契機論に共通することとしては、自らを現前化／表現することは可能だが、自らを記号表示する (significare) ことはあり得ないということである。記号表示は自らとは異なるものを現前化／表現するものであり、現前化するものと現前化されるものが異なっていることが条件となる。

三契機論と四契機論の差異は、「認識能力が現前化／表現する」ということを認めるかどうかである。は、事物の側に帰属する作用だということである。観念や概念が現前化／表現するのではなく、事物の方が現前化／表現するのである。

ツェラヤ (四契機論者) では、現前化／表現が objective, effective, formaliter, instrumentaliter と 4 通りあったのだが、ソトやポインソ (三契機論者) においては、obejective, formaliter, instrumetaliter と 3 通りしか考えられていない。

四契機論者においては、effective に現前化／表現する層を認める場合でも、視覚や知性が repraesenare すると考えられている。

三契機論者においては、認識能力が表現することが否定されている

と考えられる。このことを明確に表現した人物としてはアリアガのロドリゴ (Rodrigo de Arriagal 1592-1667) がいる。ロドリゴは「認識能力とは、それに対象が現前化／表現されるものであって、現前化／表現するものではない (potentia est, cui repraesentatur obiectum, non quae epraesentat.)」 (cf. S.Meier-Oeser, Op. Cit. p. 799)。

四契機論が否定され、三契機論が主流となり、しかし同時期のイギリス、フランス、ドイツにおいては、そういった名辞論的分类は影をひそめ、17世紀的な「表象 (repraesentatio)」が支配的であった。その概念的な変遷の過程はほとんど未解明といってよい。上記に訳した資料が役立てば幸いである。